

アドラーのケースセミナー 『母親による支配』*

浜田高子（岡山）訳

* Adler, A. : Maternal Domination, in The Pattern of Life(1930)

要旨

キーワード：

問題

今夜は11才8カ月のロバートの事例を考えましょう。担任教師は、ロバートが知恵遅れなのではないかと、いくらか疑っています。知恵遅れは、たいへん難しい複雑な問題です。われわれは、知恵遅れの診断にはとても慎重でなければなりません。というのは、患者の人生が成功するか失敗するかは、完全にわれわれの決定にかかっているからです。

この年齢の完全に正常な子どもは、少なくとも5年生には進級していると考えてよいでしょう。しかしケース記録には次のように記されています。

—ロバートは、進級が遅れていて、今なお3年生である。知能指数は非常に低い。彼は教室では静かで従順である。入学以来ずっと、彼はいつものろまでおずおずしていたし、ごく最近まで話そうとしなかった。

これを読むと、ロバートにはかなりの程度の知恵遅れがあるように思えるでしょう。しかし、まれに、のろまでおずおずしていて、しかも知能が正常な子どもというのもあります。とくに、左利きの子どもの場合に、よくそういうことがあります。

しばしば左利きの子どもは、手先が不器用で、たくさんの挫折や失敗を経験していますので、慎重になってしまって、ゆっくりと動作するようになります。

ロバートがごく最近まで話そうとしなかったというのは疑わしいですね。というのも、われわれは、このことは、知恵遅れの子どもたちによく見られる問題であり、実際に重度の発達障害児はまったく話そうとしないことを知っていますが、一方、ある種の甘やかされた子どもたちもまた、遅くまで話さないことを知っているからです。ドイツ語だとこのタイプの障害のための特別な言葉がありますが、英語にはそのような言葉はありません。これらの子どもたちは、耳は聞こえているのですが、発語しません。ですから、聾啞ではありません。そのような状況にある子どもが知恵遅れであるかどうかを決めるのは非常に難しいことです。また実際に、このような子どもたちのうちのある者は、後に、知的であり、とても上手に話せることを、証明してみせてくれます。もう死んでしまった人もまだ生きている人もいますけれど、はじめは非常に苦労したけれ

ど、後にはすばらしく雄弁に話すことができるようになった人を、私は何人も知っています。

ロバートの事例について、われわれは、2つのタイプ、すなわち知恵遅れなのか、あるいは甘やかされた子どもなのか、そのどちらであるかをみわけなければなりません。ある側面については、甘やかされた子どもと知恵遅れの子どもとは、とてもよく似ています。また、ひとりの子どもが両方をあわせもっているということもありえます。われわれは、ほんとうのところをつきとめるのに苦労するかもしれません。

家庭背景

—父親は、背が低くて、がっちりした体格である。仕事を退職して、今は働いていない。母親は魅力的な美人である。16才と14才の2人の姉がいる。両親は気心があっており喧嘩はない。しかし母親が家庭を支配している。母親は「父親は2番目の女の子がいちばん好きなのですが、ロバートが私にいちばんなついています」と言っている。

彼は、家の中で唯一の男の子であり、赤ん坊であって、そのことである種の特権的地位をもっているのがわかるでしょう。幸せな結婚生活をしている家庭で、一方の親が家庭を支配するなんてありえないと思います。それは矛盾しています。母親の、ロバートが彼女になついている、という言葉は、事実の半分しか言いあらわしていません。彼女は、「そして、私はロバートを甘やかしてきました」とつけ加えるべきでしょう。

—ロバートは、家中の誰よりも母親といちばんよく話す。家族は彼をバスター（騒がせ屋）とよんでいる。彼はのろまで遅れているのだから、これはとても似つかわしくないニックネームである。2人の姉はハイスクールにいており非常によくできる。

家の中で一人の子どもがよくできると、通常他の子どもたちに面倒がおこります。知的な子どもの優越性は、逆に他の子どもの劣等生をめざませます。目下検討中のこのケースにおいては、おそらくこのことがおこっているのでしょう。

かわいがられすぎた子どもは容易にくじけます。おそらくこのことがロバートの問題なのでしょう。このことはわれわれに希望をもたせます。なぜなら知恵遅れの子どもよりも知能の高い子どもの方がくじけやすいという事実があるからです。

このことから、ロバートは、就学以前にはもっと勇気があったと推量してよいでしょう。結局、これは知恵遅れのケースではないでしょう。

—二人の姉の小学校での試験の成績が保存されていた。ロバートの教師は、姉たちの成績とロバートの成績とを比較して、彼をくじけさせてしまった。

この記述は、われわれの見解の正しさをじゅうぶんに確証してくれています。

—父親はロバートにたいして拒否的な態度をとる。父親は、ロバートは生まれながらの知恵遅れであり、今後もずっとこんな風だろうと信じている。

母親の言うところでは、どの子ども一度もたたかれたことがないという。

母親は、「ロバートはたった一人の男の子で、かわいいネンネちゃんで、それなのに人並みで

ないということを知ったとき、私たちがどんなに驚いたか、とてもおわかりにならないでしょう」と言っている。

父親が絶望してしまっていることがロバートをくじけさせています。なぜなら、子どもはしばしば、自分について父親が抱いている意見に添って発達するからです。それゆえ、子どもを勇気づけて、正常な発達をとげる望みがあるのだと感じさせることが、われわれのつとめであることになります。この子が公立学校の3学年まで進級できたという事実は、これが望みのないケースではないと私が信じる根拠です。

知恵遅れではないかという疑いをいったん完全に捨てて、ロバートを単なる問題児として考えて見ましょう。われわれは、家庭内での彼の位置が、非常に窮屈なものであることに気がつきません。彼は母親とは非常に近い位置にあって、母親の支援を求めて彼は依存的になっています。他方では、彼は彼よりもできる2人の姉とは競争できません。彼は勇気がないので争いません。これまでに見てきたように、いつでも静かにしています。

このような子どもがちゃんと発達するなんて、ほとんど期待できることではありません。たとえば、狭い場所にうえられた三本の木のようなものです。三本のうちの二本が困難にうちかって強く育った場合には、三本目の木は思うようにのびることができないでしょう。同じことが人間の子どもにもいえます。この家では、2人の姉たちが空間すべてを占領してしまっていて、ロバートは低いレベルに目標をおいて進歩しないように強制されてきました。

こんな風にして、われわれはロバートの発達の全体像を説明することができます。

一姉たちはお互どうしとても仲がよい。ロバートは上の姉の方によく話す。上の姉は、彼を散歩につれていったり映画につれていったりする。彼は、下の姉は彼をいじめると主張し、しかえしに彼女をいじめる。

下の姉とロバートは両極端です。下の姉は活動的で積極的です。彼女に関して多くは語られていませんけれど、彼女が同胞のなかで一番であろうと努めていることはほとんど確かです。一方、ロバートは、くじけていて、努力を放棄してしまっており、下の方にいようとしています。

ロバートと下の姉とが互いにいじめあうという事実は、彼らが競争関係にあることを物語っています。彼女は14才で、彼はほぼ12才です。これは彼が生まれた時に彼女が2才半であったことを意味します。彼女は彼が生まれたことによって追い出されたように感じて、攻撃を直接彼にむけました。それはうまくいって、その結果、彼はもうそれ以上は競争しようとしなくなりました。

一家の財政状態は悪くない。母親が家の中を取り仕切っている。父親は小さな食料品店をしていて、一家はそれで生計を立てている。少女たちはよい身なりをさせてもらっていて、暇な時にも家事の手伝いはしない。家は五部屋あって、シングルベッドが五台ある。全員が一人で寝る。ロバートは顔を壁にむけて眠り、ときどきからだをちぢめて丸くなって眠る。

私は、睡眠中の姿勢に関していくつかの研究をおこないました。そして、人々の眠り方を観察する事によって非常に多くのことが発見できました。ロバートの眠りようは、まるで、「僕は勇気がない、僕は何もみたくない」と言っているようです。彼が眠るときに身体を縮めて丸くなるということは、「姿をかくしたい」あるいは、「ハリネズミのようにボールになって、敵にみつからないようにしよう」ということを意味しています。(訳註1)。

—父親は、ロバートと同じ部屋で眠る。母親が言うところによると、ときどき彼女がロバートと一緒に横になって、寝かしつけてやらなければならない。

この後の方の事実は重要です。なぜなら、これはロバートが強い恐怖心を持っていて、母親が臆病な彼を支えるように求めている、ということの意味するからです。ロバートは独立した人間として生きることを望んでおらず、いつでも母親の注目を引きつけるように行動しています。この子を、母親と一緒におれない状況、たとえば学校の教室のような状況におくと、彼はたちまちくじけてしまいます。ちょうど眠るときの姿勢に象徴されているように、ある方法で、彼は現実から背をむけ、眼をとじてしまいます。彼がいかなる問題にも直面することを望んでいないのは明らかです。

—母親は、他の子の場合より後まで、ロバートに添い寝したことを認めている。両親はイタリア系移民である。ある種のイタリア系家族に見られるほどは、父親は母親や娘たちにたいして権威的にふるまうことはない。母親は、「私在家の中でいちばん権力があります。夫はときどき、男ならみんなそうであるように、私が外出するのをいやがって、『くたくたになるのなら出かけるべきじゃない』といますが、ロウるさくはありません」と述べている。

母親のことは、すでにわれわれがうすうす感じてきたように、ロバートは、姉たちよりもずっとたくさんご機嫌とりをされて育てられてきたことを証明しています。またその上に、父親は女性たちを低く評価することはせず、支配的な妻を抑えようとしないでやってきたことがわかりました。

生活史

—ロバートの身体的発達は以下の通りである。出産は12時間かかったが、自然分娩であった。難産で、生れたとき、ロバートの顔はまっ青だった。生下時体重は12ポンド（5、400グラム）であった。

この難産だったということは、一般に信じられている程は重要ではありません。おそらくこの子は大きな頭をしていたのでしょう。出産時に、女の子よりも男の子の方が大きな頭をしているのは、きわめてありふれたことです。

—母親は、ロバートはかわいい赤ん坊ではなく、生まれた時は黄色い肌をしていたと言っている。2カ月の時には湿疹ができて、15カ月になるまで続いた。頸がすわった時期は正常であり、生後6カ月目には座れるようになった。8カ月で歯がはえ、同時に離乳をはじめた。食物に関してはかなりのトラブルがあった。たべられるものとたべられないものとがはっきりわかるまでの間、よく腸炎をおこした。9カ月で固形物を食べはじめた。15カ月の時、トイレット・トレーニングをはじめ、2才の時には全くおもらしをしなくなった。赤ん坊時代には肝油を飲まされた。母親は彼を大きくするにはどうしなければならないかには気を配ったが、彼が話さないのは何がいけないかということには注意をはらわなかった。2才の時にはじめて歩いた。

誕生の時にたちあった医師だけが、黄色い肌と早期の湿疹についてわれわれに適切な情報を与

えることができます。[したがって、これについてはコメントしません]。

彼が2才まで歩こうとしなかったのであるならば、小児くる病であったことが疑われます。

—彼は、動作といくつかの音によって意志を伝達した。家族はそれを理解したし、とくに母親は非常によくわかった。

母親が子どものこのような動作を理解したというのは、非常に不幸なことです。話すことが不必要だったのだから、ロバートがことばを発達させようとしなかったことは、いっこうに不思議ではありません。

—聴覚に欠陥はない。医者は母親にロバートのことを心配しないように、そのうち自然によくなるだろうから、放っておきなさいと言った。

ロバートは5才になってようやく話しはじめた。同じころ、アデノイドと扁桃腺の手術を受けた。その後は大病はなく、何でも食べるようになった。

心に願うことをすべてかなえられた子どもが、4才になってもまだ話さないということは、じゅうぶんにありうることです。一方、このような子どもが食べ物の好き嫌いをし、あるいは夜尿をするということをよく耳にします。この患者にはそういうことはないから、彼は母親との関係のあり方にずっと満足し続けていたし、状況を改善しようという必要を感じないままでおれたのだとみてよいでしょう。

—過去2年間、ロバートは近視を矯正するためにメガネをかけるようになった。約1年半前から、彼は自分で着脱衣ができるようにしつけられている。服を着るときには、長いことグズグズするので、いつでも早くするようにせかされる。どちらの靴をどちらの足にはくかをきめるのに、いつもかなり時間がかかる。

彼は大ていの同年の子どもよりも大きくて重い。身長は5フィート（150センチメートル）、体重は100ポンド（45キログラム）である。

この子が10才まで自分で服を着ようとしなかったのは、相当甘やかされてきた証拠です。彼が自分で服を着ることにひどく無関心なのは、母親に助けてもらいたいと望んでいるからです。彼が同年の子どもたちよりも大きいという事実は、脳下垂体の障害がある徴候かもしれません。しかし、一方、それは、彼が健康な子どもで、母親が十分に養育したというしるしであるにすぎないかもしれません。

—は字を書くのは右手だが、それ以外のことはすべて左手です。

これは、非常に重要なポイントです。というのは、この子が、右利きの世界に直面して適応することに挫折した、生まれつき左利きの子どもであることがここで証明されたからです。
(訳註2)

—ロバートはいつでも母親と上の姉についてまわっている。彼はめったに父のことを話題にしない。

一日の時間の大部分を母親と過ごし、父親は、子どもとの関係に関しては、母親とはどうても太刀打ちすることができないような、甘やかされた子どもについては、ここに述べられたようなことは、ごくありふれた状況です。

この父親は大きな誤りを犯しています。特にロバートにたいして絶望していることは、大きな間違いです。上の姉は、われわれの患者であるロバートを家来にすることに成功しているようです。彼が父親とよい関係を持つことは、とても難しい問題です。母親がいる限り、この子はいつでも母親の方に引きつけられてしまうでしょう。

父親はロバートを旅につれていったりして、一緒にいい時間を過ごし、彼と仲よしになるべきだと思います。おりをみて、父親は、ロバートの知能に関して間違っただけの思い込みをしていたことに気づいたということ、ロバートに伝えるべきです。われわれの治療は、ロバートと父親の和解からはじめるのがよいでしょう。

—母親はロバートをよくお遣いに出す。彼はお遣いに行くのが好きだし、お遣い先での出来事を話すのも好きである。同時に2つ以上の品物を、買ってきてもらおうとするときには、メモに書いてやらねばならなかった。しかし、われわれが治療をはじめたことであるが、店の主人が母親に助言して、ロバートにメモを渡さないことにした。その結果、進歩が認められた。

店へお遣いにゆく時に2つ以上の品目を覚えることができない子どもなんて、ほとんど想像することもできません。店の主人は、しかしながら、ロバートのことを理解し、彼の状況をよく見通しています。このような洞察力を持っている人は世の中に沢山おられます。ここで進歩が見られたという事実は、ロバートには進歩の可能性があるということを証明しており、これは非常によいしるしです。なぜなら、このことは、われわれがこの子に見いだした問題点のほとんどは、実は解決可能なのだということの証拠になるからです。

—母親は、ロバートが、ときどき架空の子どもに話しかけたり答えたりしていることに気がついている。通常相手は男の子である。その時には、ロバートは近所の少年たちのように、あらっばいことばで上手に話す。顔はいきいきとしていて、まるでケンカしているようにみえる。

子どもたちの多くは、架空の子どもと話すこういった遊びをします。こんなにも長い間うまく話せなかったこの子が、話すことを自分からすすんで訓練しているということ、自分自身のことばだけでなく、他の子どものせりふまで考えているということは、非常に興味深いことです。この子は、大人になって、脚本家や演出家にすらなれるかもしれません。左利きの子どもたちはしばしば芸術に興味を持ちます。

われわれはまた、ロバートのこの遊びと、彼が姉たちとロゲンカをするという事実から、彼が男の子との仲間づきあいを求めているのではないかと推察します。とくに母親が支配的な女性であることから、この子はおそらく、女性にたいする恐怖心と、女性の力にたいする過度の評価とを、すでに発達させているものと思われます。

この子は明らかに、内気な子どもによくある活発な想像力を持った子どもであるようです。白昼夢の中で、英雄的で勇敢で勇気にあふれた態度をとるのは簡単なことです。ほんとうはこの子は臆病者なのですが、そう考えたのでは傷ついてしまうので、想像の中で、自分は英雄であると信じようとします。われわれの仕事は、彼に現実の中でも勇気をもって生きる方法を示してあげることです。

—ロバートは、近所の子どもたちとは遊ばない。彼は、「近所の子どもたちは僕と遊び方が違うんだ。あの子たちはいつでもケンカばかりしているし、僕はケンカは好きじゃない」と言う。

ときどき彼は声のないひとり笑いをしながら何やらモゴモゴと呪文のようなことばをつぶやいていることがある。母親はそれをとて心配している。それは、ひどいときもあるし、まったくないときもある。

彼は臆病だから、近所の子どもたちとは遊べません。一方、母親が心配している、笑いながらの呪文は、母親の支配力を弱めるためのロバートの道具です。おそらくそれは、母親がロバートの要求を聞き入れないか、あるいは、十分に彼を甘やかしてやらない時に、一番ひどくなるのでしょう。

—ときどき、睡眠中に、彼はベッドの上に座って、さまざまのことについてひとりごとを言い、それからまた静かに横たわって、ぐっすりと眠り込む。

子どもたちの多くは、夜、母親にきてもらいたくて叫び声をあげます。ロバートは母親に単に暗示を与えるだけで満足しています。

学業

—学校では、ロバートは友だちをつくろうとするが、すぐにくじけてしまう。子どもたちは彼ののけものにするのではないし、彼を名前で呼んでくれる。

今までに彼には沢山の教師がいたが、彼は以前の教師の中で二人だけしか名前を思い出せない。

甘やかされた子どもというものは、簡単に友だちを作れないとなれば、すぐにあきらめてしまいます。ロバートは教師たちを好きではなかったので、教師たちの名前を思い出さないので。これは、記憶力が悪いのではなく、忘れることを望んでいるのです。

—ごく最近、彼は学校でまわりの子どもたちと話しはじめた。

彼は6才の時に入学し、1年生前期過程に2学期、1年生後期過程に3学期、2年生前期過程に2学期、2年生後期過程に2学期、3年生前期過程に1学期、3年生後期過程に2学期を要しており、今は3年生後期過程の2回目である。

他の子どもたちに話しかけないという事実は、かさねてわれわれの患者がいかに孤立しているかを示しています。それにもかかわらず、彼は向上しようとしはじめています。

彼が、もっと後ではなく、6才の時に学校にゆきはじめてのは幸運でした。何度も留年してしまったことが彼を勇気づけたとは、ほとんど考えられません。彼は、授業にはあまり興味がないようです。彼に希望を与えるのがわれわれの務めでしょう。そのようにするひとつ方法は、実際の成績はよくなくても、よい点数を与えることです。このやり方は、見かけほどは間違ったやり方ではありません。悪い成績を与えて彼をくじけさせるのは、あまり意味がありません。私が勧めたいやり方は、彼が進歩を示すまでは、一切の成績評価を与えないことです。彼にもやりとげられると教師が確信できるような、簡単な課題を彼に与えることは、良いことだと思います。教師は、彼が特に興味を持っていることをみつけるべきです。そして、彼が、自分の興味のあるこ

とをやりとげるように勇気づけるべきです。実際に有用な人であり得るのだということを彼に示すことが教師の仕事です。

このようなことが公立学校においては非常に難しいということを、私は知っています。他の子どもたちが、ロバートだけがひいきされていると異議をとるかもしれないのもわかります。これにたいする私の答えは、教師がある子どもを援助しようとするとき、クラス全体が教師に協力しようとするような雰囲気を作り出されなければならないということです。みんなが協同して援助するならば、われわれの患者は救われるでしょう。(訳註3)

—習字は中学1年生の水準に達している。

これこそ彼が前進した一部分です。彼は手を訓練しました。これはロバートが左利きの子どもとしての欠陥を補償したことを示しています。ところが、この特別な障害を克服したのにもかかわらず、ロバートはくじけてしまっています。多くの人々、成功体験よりも挫折体験の影響を受ける方を好みます。内気な子どもは、しばしば成功体験よりも挫折体験の方を大きく評価してしまいます。

—ロバートは絵が下手である。

この記述にもかかわらず、私は、もしロバートが興味を呼びさまされたなら、絵画やデザインに相当な才能を発揮するだろうと信じます。これは、彼の視力の弱さの補償のひとつの方法にもなります。教師は、彼は学校では眼鏡をかけていると言っていますが、おそらく彼は眼鏡をかけるのが嫌いでしょうから、自分の目を十分に使いこなす訓練をしていないでしょう。

—彼は本を読むのが非常に遅い。

左利きの子どものある者は、単語の中の文字を逆にする傾向があるので、本を読むのが遅いということは、よく知られた事実です。おそらく、ロバートは、この種の左利きの子どもなのでしょう。私の研究仲間の一人であるアリス・フリードマン博士は、左利きの子どもたちは本を読む時に単語の文字を逆にしたり入れ換えたりするという事実を発見しました。右利きの人々にとっては、左から右への動きが正常です。しかし左利きの人々は、右から左への動きの方がより簡単です。そして、この基本的な傾向は精神全体にゆきわたります。左利きの子どもが、このような特質を認識されないまましていると、学校では沢山の失敗を経験しますし、右利きの子どもたちと本読みを競うことができないので、ついには学業に興味を失ってしまいます。読書や描画についての失敗は、かならずやその子が直面すべき問題全体に投影されてしまうので、その子の進歩が止まってしまったとしても驚くにはあたりません。もしロバートが左利きと関連した本読みの能力の障害に悩んでいるのであれば、彼を再訓練する必要があります。

目安になる沢山の徴候があります。もし単語を書くときに文字の順序を間違っているのであれば、あるいは動物の絵を描くときに右から左に動かしながら描くようであれば、あるいは両手の指を組み合わせるときに左手の親指を上にするならば、それは彼が左利きであることを推定させる証拠となります。

—彼の書取には間違いの癖が二つある。ひとつは、単語はわかっているのだが、二つの文字を逆にすること、もうひとつは、単語を知らないときには、ほとんどの場合 e で単語をはじめるこ

と。教師は、この二つは、彼の左利きに由来するものと考えている。

私は、これは彼の絶望の徴候であると信じます。彼はただ、どのようにやればいいのかわからないだけなのです。^(訳註4)

— 1926年3月、特殊学級編入のために、ロバートは教育委員会の検査をうけた。彼は当時8才であったが、精神年齢は4才6カ月とのことであった。

われわれは、どのようにしてこの少年が知恵遅れを疑われていったか、その過程を容易にみてとることができます。しかしながら、知能テストというのは決定的なものではないのですから、われわれはこれまでの線上的診断を中断すべきではないでしょう。

かわいがられすぎた子どもは、学業での失敗に非常な恐怖心をもっているのです。テストをうけるときに集中できないことを、われわれは知っています。ですから、そのような場合には、テストの結果は信頼性が乏しいのです。低い知能指数は、知恵遅れの子どもでも見られるのと同様に、甘やかされた子どもにおいても見られます。心理テストの結果は、他の所見全部と整合性があるときにのみ有用なのです。この事例では、テストの成績が悪いのは、母親に甘えていたいという子どもの願いのためと、子どもがひどく勇気をくじかれてしまっていることの結果なのです。^(訳註5)

—スタンフォード・ビネー・テストによる彼の知能指数は52であり、3才からたかだか7才程度の知能であった。ハガティ―読書テストによる読み取りの結果は、1年生前期の成績であった。ウッディー・アッコール混成基礎学力テストによる算数の成績もまた、1年生前期の水準であった。ロバートはテストには大変興味をもっていて、楽しそうに協力的だった。

この最後の記述は、この子が甘やかされてきたことのもうひとつ理由を教えてください。[すなわち、彼は、かわいくふるまうのです]。そして、彼がかわいくふるまえるということは、そうすることの効果を知っているほどの知力を持っているということを示しています。

—彼の反応時間は早く、注意力は良好である。彼は、習慣的に自分が言った文の最後の単語をくり返した、とテスト所見には書かれている。しかし、現在の担任教師は、ロバートのそのような癖を見たことがない。

単語をくり返すのは、確信のなさの徴候であり、しりごみや口ごもりによって時間をかせごうとする試みです。現在の担任教師がロバートのこのような行動を見たことがないのは、教師がロバートを締めつけていないので、彼が教師を恐がっていないからでしょう。

—ロバートは精神発達が非常に遅れており、色や形の識別も失敗した。なお、このとき彼は眼鏡を着用していなかった

まちがいなく、この子は眼に器官劣等性があります。彼はあるいは色盲であるかもしれません。形を識別できないという事実は、彼が適切な訓練を受けてこなかったことを示しています。

—数字に関する、記憶力は4才児水準である。一方、物語についての、記憶力は3才児水準で

ある。

この情報は全く絶望的であるように思われますが、しかし非常な緊張のもとでは、知的な大人でも数をかぞえることができなくなってしまうことがありますし、この結果を評価するにあたっては、テスト中のロバートの感情と態度とが重要な参考資料になります。

—彼は特殊学級に入るように助言された。しかし母親が同意しなかったので、進歩の遅いクラスに入れられるにとどまった。

彼は夢を見ないと主張している。

もし夢を見ないのであれば、それは今の状況に全く満足しているからです。すなわち、完全に甘やかされて生きるという目標を彼が達成している証拠であり、彼はこの世の中にどんな問題も感じていないという徴候です。家庭でも学校でも、彼は安全を手に入れました。彼はもはやこれ以上は努力しないでしょう。

早期回想と特殊診断質問

—ロバートは、幼年時代の思い出は何もないと主張する。しかし、「小さい女の子がよく僕に自転車を貸してくれた」と述べている。これは実際には最近の出来事なのだが、彼は、あたかもそれがずっと以前に起こったことであるかのように話す。

この回想はこの子のライフスタイルによく合致します。すなわち、彼は、みんなが自分の召使になることを望んでいるのです。^(訳註6)

—「望みは何か？」と問うと、あるときは、「大きくなって、ちゃんと書取ができるようになりたい」と言い、またあるときは、「お父さんの店を掃除してあげたい」と言った。

もし第1の望みを誰にも教唆されずに自力で思いついたのであれば、それは、この子が自分の問題点を理解して、将来それを克服しようとしているよい兆候です。一方、第2の望みは、父親にもまた好かれたいと思っていることを示しています。

—もうひとつの望みは、「大きくなって、街中を遊びまわれるようになりたいということであった。「お金を稼ぐために働くのはいやだ」とも言う。

願いごとが3つかなえられるとしたら、「大きくなること、強くなること、勉強ができるようになること」だと言う。3つのうち、最初の2つは全く自然に思いついたものである。

労働を回避したいというこの子の望みに、われわれは再び挫折のしるしを見出します。3つの願いの内の最初のふたつは、この子にかぎらず、すべての男の子が望むことであると私は思います。特にアメリカでは、運動能力がとても重要な役割を果たしますからね。彼が勉強ができるようになりたいと願っているということは、どこに問題があるかを示しています。[すなわち、彼は、努力によってではなく、魔法によって学業の問題を解決しようとしているのです]。

—「本を読むために家にいるか、あるいは、街に遊びに出かけるか、どちらを選ぶか」と問うと、後者を選んだ。

教師は、本児は体が大きすぎることによる不器用さに加えて左利きというハンディキャップを背負った、挫折した子どもの事例であると考えている。そこで、両親にたいして、ロバートに責任をもたせるように、かれの適切な行動に注意を与えるように、彼の前で姉たちをほめないようにと助言した。またクラスで彼に責任をもたせた。すなわち、用紙をくぼったり、窓を開けたりするといったようなことを彼にまかせた。彼は教師の顔色にとても敏感である。最初のころ、彼は用紙の量にちょっと不満を述べたりした。しかしいくらかの改善がみられるようになった。

教師は、この子を援助するのにまさに最上の方法を選びました。私にも、これ以上よい助言をすることはできません。

ただ、今までの教育法にいくらかの誤りがあったということ、この子に説明しておいた方がよいように思います。また、彼が姉たちの水準まであがることができるとわれわれが信じていることを伝えて、彼を勇気づけたいとも思います。さらに、今まで余りにも母親に頼りすぎて、そのために自信をなくしてきたから、それはうまくなかったねとも、彼に説明してやりたいと思います。

何事についても、すぐには成果が上がりなくとも、きっとその内うまくできるようになるよと、彼にむかって保証してあげなければなりません。それは泳ぎ方を学ぶのに似ています。はじめのうちはまずい動きばかりしてしまうものです。そうじゃなかったら、泳ぎを習うことなんかなくて、はじめから泳げますものね。すぐには泳げませんが、誰でもやがては泳げるようになります。このように、ロバートが理解できる言い方で説明してあげなければなりません。(訳註7)

また、この子は、友だちとよりよい関係を持つことを学ぶ必要があります。母親という時間よりも他人という時間の方が多くなるように、放課後に、グループやクラブ活動に参加させたらよいと思います。

なぜ本読みが苦手なのか、そのわけを彼に説明して、正しく読めるように再教育しなければなりません。もしも絶望状態から救い出すことができれば、この子はかならずや向上するでしょう。

事例報告の最後に述べられていた諸点は、この子がすでに正しいルートに乗っていることを示しています。そして私は、教師が一層の進歩見出さだろうと確信しています。さらに、母親と話しあって、ロバートが知的な子どもであること、しかし彼女が彼を自立させたとき、はじめて彼の知性が発揮されるのだということ、彼女に説明しなければなりません。

この事例をめぐる諸問題から、問題児のほとんどが、実は甘やかされた子どもであるということがおわかりになったかと思います。(訳註8)

面接

(母親入室)

アドラー：私たちはロバートについてあなたとお話したいのです。彼は知的な少年だと私たちは信じています。ところが、あなたが彼に代わって彼の問題を解決してやっているかぎり、彼は自立して行動するのを感じないと思うのです。そして、このことが彼の問題の最大の原因であると思うのです。

あなたは状況を変えることができます。あなたは彼をもっと自立させなければなりません。ロバートをよその子どもたちと交わせなければなりませんし、友だちともっとつきあわせな

ければなりません。自由時間はクラブに参加させたり、集団で遊ばせたりしましょう。ずっとあなたと一緒にいるのは、ロバートにはよくありません。なぜなら、ロバートは、どうすればあなたを支配できるかを知っていますし、いつでもあなたが何をしてくれるかを知っているからです。

私たちはまた、ロバートが左利きで、そしてこの左利きであるということが彼の問題、特に本読みや書取の問題の大きな原因になっていると信じています。ちゃんと教えてあげれば、ロバートも他の子どもと同じように本読みや書取ができるようになります。しかし、何度も失敗してきたので、彼は今のところは、いじけていて、新しいやりかたを学ぶのを嫌がっています。

一人で洗面させたり服を着たりさせてください。もし失敗しても、うるさく小言を言わないでください。

ロバートがお父さんともっと親密に接触できるようにした方がよいと思います。御主人にロバートにチャンスを与えるようお願いしてください。ロバートがお父さんと2・3日旅に出て友だちになれたとしたら、とてもいいと思います。ロバートは、お父さんから、将来の成功を信じていると、何度も言ってもらう必要があります。

彼は正常な子どもだというのが私の意見です。もしお許しを得られるならば、今ここで彼と会って、彼がもっと自立できるように援助できるかどうかやってみたいのですが。

母親：ロバートはとても緊張してしまうだろうと思います。私自身だって緊張しています。だって、こんなに沢山の方の前でお話しするとは思っていなかったんですもの。(ロバートが呼ばれる。彼が部屋に入ると、母親が、「おいで、バスター」と言うと、彼はまっすぐ母親のところに来て、両腕で母親に抱きつく)

アドラー：君はお母さんを守ってあげなくてはならないの？ 私はお母さんが気を失っちゃうとおもわないんだけどね。お母さんはきっと一人でいることができると思うよ。君はお母さんにずっと守ってもらいたいのか、それとも大人になりたいかどっち？

ロバート：大人になりたい。

アドラー：君は何でも一人でやりたいか、それとも君のかわりに他の人にやってもらいたいかどっち？

ロバート：僕のかわりにお母さんにやってもらいたい。

アドラー：お母さんのことを好きなのはとても素敵だ。だけど、君のかわりにも何でもお母さんにしてもらうことはできないよ。もっと一人でいろんな事をするようになったら、きっと、もっとずっと幸せになると思うよ。いろんな事を一人でやってみてごらん。他の子どもたちは、もっと前にひとりでもいろんな事をやりはじめているだろう。君は遅くにはじめたから、ちょっと困ったことがおきてしまった。でも、君は自分でなおすことができますよ。もし君が今からは何でも一人でやることにするならね。一人で歯を磨いたり、一人で顔を洗ったり、一人で服を着たりね。お母さんに邪魔させちゃいけないよ。ねえ、一人で何でもできるようになったら、どんなに素敵だろうかと思わないかい？君は水泳を習ったことがある？

ロバート：はい。

アドラー：はじめのうちは大変だったろう。水泳と同じように、どんな事でも、上手にできるようになるにはちょっと時間がかかります。はじめは大変だけど、しばらくするときっとうまくできるようになります。水泳が上手にできるようになったんだから、本読みも上手にできるようになるし、計算も上手にできるようになりますよ。でも、君がそれをしなければいけない。辛抱強くね。お母さんにかわりにもやってもらおうと思ってはいけませんよ。君はきっとできるようになる。他の人たちにもできるんだから、君だってできる。心配しないでいい。君の先生は、君は最近かなり進歩したとおっしゃっていたよ。とてもすばらしいことだ。君は遊び友だちが

欲しくない？クラブ活動をやってみないかい？

ロバート：面白そうですね。

アドラー：楽しいクラブを探してみよう。そこで君は友だちと遊べるし、お話もできるし、どんなに君がひとりでやってゆけるかを見せることもできますよ。それから、お父さんと旅行にでかけたら、きっと素敵だろうと思います。

(ロバートと母親は退場する)

学生：左利きの人には右手で書くことを教える方がいいですか？

アドラー：二つの理由で、それはいいことだと私は思います。第一の理由は、われわれの文明全体が右利き用にできていることです。第二の理由は、左手ばかり使っていると目立ってしまうことです。そうすると、自分は他の人とは違っているとか平等でないと思ひ込むようになりがちです。あなたがたはきっと、左利きの人々が不利だという統計を見たことがあると思います。しかし、私の統計では、左利きの人々の多くには芸術的才能があり、特に右手を訓練した場合にはそうであることがわかっています。

左利きの子どもに右手が使えるよう訓練すると、吃音になるという迷信がありますが、本気にしてはなりません。実際は、誤った方法で訓練がおこなわれて、子どもが叱られたりはずかしめられたりするのです。吃音でもって不服を表現するようになる、ということなのです。

子どもが本質的に左利きであるのか右利きであるのかを教師が知っていることは、とても重要なことだと思います。というのも、もし左利きの子どもが間違った方向に努力して苦しんでいるなら、それは長年月にわたって悪影響をのこすおそれがあるからです。

学生：とても早熟で、10歳でもう中学へ進学できる程度の学力がある男の子で、両手が使えるのですが、右手で書かせようとすると興奮します。つまり、泣き叫びますし、右手では書きたくないと言うのです。このような場合、先生だったらどうなさいますか？

アドラー：それは、これまでの訓練のやりかたがよくなかったのです。

学生：その子は、とても上手にピアノを弾くのですが。

アドラー：右手を訓練する時にピアノにたいするその子の興味を利用することができればよいのですが。この訓練は、利害関係のない、科学的な見地からのみ子どもに話しかけることができる人がしなければなりません。ピアノを弾くことによって両手をきたえることができることはおわかりになるでしょう。

学生：左利きの子どもを訓練する具体的な方法を教えていただけませんか？

アドラー：ええ、喜んで。左利きの球技の選手やボクサーが、左手よりも右手の方がすばやく動くようになるように、自らを訓練することご存じでしょう。成功はいつでも努力する人のところにやってきます。これは、特に芸術の世界における左利きの人々についてあてはまります。

さて、われわれの事例に戻りましょう。ロバートの最大の問題は、学業にあることがわかりました。あなたがたは、彼がどんなふうにして部屋に入ってきたか、そしてどんなふうにはちまちま母親にしがみついたかを覚えていますか？これは彼の生活全体の特徴をあらわしています。すなわち、彼は母親が自分を支えてくれるように望んでいるのです。しかし、彼がわれわれの支持を実行してくれたならば、短期間にどんなに進歩するかを、あなたがたは見る事ができるでしょう。

学生：先生は、どんな環境下にある場合でも、ああいった子どもにたいして、体罰は助言なさらないのでですか？

アドラー：私がいかなる体罰にも反対していることをご存じのはずです。私の方法は、子どもがおかれている状況を調べた後に、その結果えられた知識を子どもに説明し、そして納得させる

ことです。あのような子どもを殴ったりして、いったいどんなよい結果が得られるのでしょうか？ 子どもを殴ることは、いかにしても正当化することはできません。だって、あの子は学校の落ちこぼれなんです。彼は本読みができません。その理由は、適切に訓練されなかったからです。そして、たたくことは訓練のしかたを改善したことにはなりません。体罰の唯一の結果は、失敗したときに殴られることに子どもが慣れること、そして不快な状況からのがれるために登校拒否に陥るだけのことです。殴られるということを子どもの立場から考えてみてください。そうすれば、それは単に子どもの困難を増大させるだけのことであることがおわかりになるでしょう。ついでに言いますと、子どもたちにしてやらなくてはならないことがわかっていない人だけが、子どもたちを殴るのだと、私は言いたい。

その後の経過

アドラー博士のオープン・カウンセリングの後で、この患者は編者（ベラン・ウォルフ）にゆだねられ、数カ月間治療をうけた。精密検査の結果、本児は、高度の難読症、すなわち、左利きの子どもに特有の読字障害を持っていることがあきらかになった。彼の左利きは非常に高度で、身体の形態上の完全な左優位だけではなく、すべての無意識的な、あるいは早期に形成された運動パターンの左優位も見られた。

本児は単語の内部構造の概念を持っておらず、単語内の文字の位置を歪曲し、また加算記号（+）と乗算記号（×）とを混同しており、またアルファベットの個々の文字と音の関係についての概念をほとんど持っていなかった。

編者が開発した運動感覚法によって、読字を教えたところ、2カ月の治療の終りには、彼の読字能力は学令よりもずっと進んだ段階に達した。

本児が一人で来談することを認めるように母親を説得することには、大きな困難があった。また、母親は、本児をキャンプに参加させることには最後まで賛成しなかった。大きな進歩があった一方で、本児がたえず自立を阻害されていて、結局完全な自立には到達しえないかもしれないという可能性が残った。ただし、これは本児の生得的な欠陥の故にではなく、母親の本児への情緒的な固執によるものである。

訳注

- (1) アドラーは早くから身体の姿勢や運動と性格・心理の関係に着目していた。これは、後にウィルヘルム・ライヒの一門やフリッツ・パールズの一門によってとりあげられ、さらに現代では、トランスパーソナル心理学の治療技法の根幹になっている。
- (2) 左利きという器官劣等性に関しては、この事例全体を通じて、アドラーはややこだわりすぎているように思われる。左利きないしその矯正が、実際にどの程度にライフスタイル発達に影響を与えるのかは、今なおよくわかっていない。
- (3) クラスをひとつのシステムとして扱う方法は、ドライカースによって幾分か現実化されたが、なお不十分であった。最近、野田・萩が『クラスはよみがえる』（創元社）において、この理論を徹底的に具体化した。
- (4) 本書の編集者であるベラン・ウォルフは、英語では多くの単語が e で終わるので、単語を最後からみる傾向を持っていた本児は、わからない単語を e ではじめるようになったのであろう

と推量している。

- (5) このように、知能テストにたいしても心理テストにたいしても、アドラーはそれほどの信をおいていない。これは現代のアドレリアンも同様で、テストは丹念な面接に優るものではないと考えられており、あくまで補助的なものでしかない。早期回想ですら、そのようなテストの限界から自由ではない。
- (6) この回想は、早期回想の基本的条件である「ある日ある所での一回かぎりのできごと」という要請を満たしていないので、診断価値は低い。なお、10歳以下の子どもについては、最近の出来事の思い出であっても、早期回想の条件を満たしているものであれば十分に診断価値がある。
- (7) アドラーは、子どもへの直接のカウンセリングを提案している。これがアドラー心理学の通常のやり方である。アドレリアンは、相手が子どもであっても、遊技療法などの特殊な方法に頼るよりも、通常の言語的カウンセリングをおこなう方を好む。それは、子どもの能力を信頼するからである。
- (8) ロバートのライフスタイルを現代アドラー心理学風にまとめておく。
- 自己概念：「私は無能力だ。」
- 自己理想：「私は常に保護されていなければならない。」
- 世界像：「母親はいつでも私を助けてくれる。」
- 結論：「それゆえ、いつでも母親に頼って問題を解決してもらおう。」

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載